

⑨からだ（保健）

違いを認めあい、生かしあう

1 研究全体のテーマとからだ（保健）部テーマの関連

からだ部では、「違いを認めあい、生かしあう」に設定し、資質としての「公共性」を育んでいきたいと考えた。「違いを認めあい、生かしあう」ために、まず子どもたちにはどのような違いがあるのか考えてみると、様々な違いが挙げられる。育った環境も違う。とりもなおさず、親の生き方や考え方が子どもに大きな影響を与えていることになる。考え方も生き方もさらに身体的な特徴など様々な違いをもっている子どもたちが、同じ学級の中で生活し、学習しているわけである。人が異質な他者を受け入れる事はとても難しいことだが、友だちとの違いを認め、生かし合うことができれば、考え方やものの見方が広まると同時に深めることが可能になるであろう。

2 からだ（保健）部で考える「公共性」

(1) 育みたいもの

からだ部として、子どもたちの健康を願い、自分自身が健康な体を作っていく主体者になって欲しいと願っている。子どもたちは、身体的には様々な違いをもっている。性差による体の違い、個々の体格、容姿、体力、運動能力の違い、疾病に対する抵抗力など様々な違いがある。生活習慣、健康に対する意識など目に見えないものもある。個々に違いをもつ自分たちの体を知り、違った考え方をする仲間の存在を通して健康観を育てていくことになり、このことから、からだ（保健）で育てる「公共性」といえるだろう。

小学校段階は、食事など家庭の管理下に置かれていることが多い。自分で管理できるような知識を身につけること、健康被害を受けないような環境を作るために、社会に働きかけられる意識も育てたい。

(2) 方法

からだ（保健）の学習の時間的は少ない。できるだけ研究的な視点、お互いの違いを生かしつつ、健康な環境を作るために外に向かって自分の意見を発信できる学習内容や方法を取り入れたい。

①考えを言い合えるような学習活動の流れを工夫する。

- ・一方的な知識伝達型の授業ではなく、子どもの考えや発言を拾い上げる。

②自分の考えを交流できる場を作る

- ・話し合いができるグループ活動
- ・配布資料等を活用し、個々の学習結果や考えなどを伝える。

3 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

(1) 5年「シークレット・フレンド」

この授業は、本大学の青木紀久代氏の紹介で、本附属四校園でも同じプログラムでアレンジして実践したものである。「心の健康」の授業の一環として行った。

「シークレット・フレンド」は、クラスの全員が誰かのフレンド（サンタ）になる。しかし誰が自分のサンタであるかは分からない。まさに秘密のサンタなのである。サンタはプレゼントを毎日渡す約束になっていて、プレゼントの内容は、物ではなく、ちょっとした親切、心配りである。自分が誰のサンタか話さないという約束で約1ヶ月間、サンタとしてクラスの仲間に関わっていく。サンタからのプレ

ゼントは毎日、振り返りシートに記入することになっていた。クリスマスの日には、自分のサンタは誰か教え合った。以下は事後の感想である。

- ・私たちの身の回りには親切にしてくれている人がいっぱいいるということが分かりました。皆気付かないうちに気使いをしていることが分かりました。
- ・いろんな人が親切にしてくれたので、シークレット・サンタは誰だか分からなかったけど、いろんな人から親切を受けた。いろんな人に親切にしたい。
- ・〇〇さんは仲が良かったので、どうやって優しく接すればいいのか迷った。サンタは難しかった。
- ・ふだん男子などには親切にしないけどこれをやって少し親切になれた。

高学年になると仲間との関わりが固定化してきている。同じクラスの仲間であっても必要以外は会話しないということもある。グループが固定化することでクラスの他の仲間との関係が排他的になっているのである。振り返りシートには、男女問わずいろいろな人からのプレゼントが記入してあった。このことは、短い期間であったが普段あまり関わっていないクラスの仲間に関わることができたと推測される。クラスの多くの仲間に関わっていることを実感し、誰もが自分とは違う仲間を支えられ、支え合うことに気づき、あらためてクラスの仲間とのつながりを見直す機会になったと言えよう。

4 第71回教育実際指導研究会での授業提案や協議会討議を経て

(1) 部会として授業改善のために目指したことや、そのための手立て

今回の提案授業は「心の発達（成長）」を扱った。心は目に見えるものではなく、学習活動の中で仲間の考えに触れることで、心を意識化させたいと考えた。自分では見えていない心の成長を他者を通して知るために、保護者に我が子の心の成長と思うエピソードを手紙に書いてもらった。そのエピソードを各自が記入した用紙をもとに、自分の成長としても子ども同士が共有できる場を作る。また、乳幼児の心の成長のビデオを見て、十分たちの成長を振り返る帰る作業を行う。

(2) 具体的な成果や問題点

ビデオの幼児が喧嘩する場面を通し、今の自分と仲間との関わり方の変化に気づいた。心の成長、特に「社会性」の成長を乳幼児・親など他者を通して理解できた。また、視覚的な教材は有効だった。

保健の教科書や、指導書では「心の発達」の單元では、心を「思考性」「感情」「社会性」の3つの側面から説明している。今回の提案授業も3つの側面から授業プランを考えた。しかし、3つに明確に分類できるものではなく、心は入り交じった複雑なものである。教材研究の必要性を再認識した。

(3) 協議会での話題・意見・質問など

- ・実践紹介の「体の発育・成長」は体格や初経年齢等の適時性を考え5年で行っている。参会者の学校では4年生で指導している。4年では自分の体として理解できない状況があり、5年の方が良いという意見が多く聞かれた。少数ながら4年生に早い時期に教えることも必要という意見もあった。
- ・提案授業は「心の発達」であったが、自分たちが心を教えるのは難しいという意見が多かった。心の授業はスキルの部分も多く含まれることが多い。養護教諭が保健として扱うのであれば人との関係性や脳の仕組みとして教えることができる。

(4) 協議会を経て今後の課題であると認識したこと

「子ども同士の心は対等であり、対等性は、異質性を受け入れることから始まる。これは『公共性』につながる。」という助言者の言葉は、からだ（保健）として提案する「公共性」（仲間との関わりを通して自分の健康観を育てていくこと）の考え方を支持すると受け取れた。しかし、本校の提案する「友だちと自分の違いを排除せずに、理解し力を発揮する子どもを育てる」という「シティズンシップ教育」の考えは、どこの学校でも意識しているはずである。では、何を提案すれば良いのかと考えると、今後も授業方法の改善に努め、授業実践を提案していくことではないかと考える。